
 記 事

例会記録

日本医史学会 11 月例会

シンポジウム：医学教育史研究／古今と東西

平成 27 年 11 月 28 日 (土)

順天堂大学 10 号館 1 階 105 カンファレンスルーム

- 江戸時代地方藩医の医学教育～米沢藩の事例を中心に
海原 亮 (住友史料館)
- 18 世紀以前の医学教育における医学理論と医学実地
坂井建雄 (順天堂大学医学部)

- 日本における外科のあけぼの——その余話

日本医史学会：森岡恭彦

- 三重県の本草学者・丹波修治

日本薬史学会：河村典久

- 「義犬」の歴史と動物愛護史

日本獣医史学会：小佐々学

- 石濱義則——治安維持法違反で広島刑務所服役中に被爆したクリスチャン歯科医——

日本歯科医史学会：樋口輝雄

日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学
会合同 12 月例会 平成 27 年 12 月 12 日 (土)

順天堂大学医学部 センチュリータワー 16 階北フロア

- 同志社と看護教育——京都看病婦学校の足跡から——
日本看護歴史学会：岡山寧子
- 佐賀薬種商野中家所蔵解剖書について
洋学史学会：青木歳幸

日本医史学会 1 月例会 平成 28 年 1 月 23 日 (土)

順天堂大学医学部 センチュリータワー 16 階北フロア

- 精神科医療の戦後 70 年 岡田靖雄
- 『医心方』にみる王朝の秘薬とその解毒法 槇佐知子

例会抄録

お玉ヶ池種痘所五人衆の足跡をもとめて

深瀬 泰旦

1978 年にはじめてその名前を耳してから、それまでまったく歴史の表舞台に登場していなかった手塚良仙という医師の業績をもとめておおくの文献を渉猟してきた。しかしその道のりは決して平坦なものではなく、どれほどの成果がえられるか皆目見当がつかないままの出発であった。いろいろな文献をよんで、手塚という医師の名があればそれをノートに留めておくという作業をつづ

けた結果、常陸府中藩に 3 名の手塚良仙をみいだし、これが親良仙光行、子良仙光照、孫良仙光亨の関係にあることも判明した。

これと平行して研究を進めたいた、江戸市中にすむ蘭方医や漢蘭折衷医の協力により、安政 5 年 (1958) に江戸の神田お玉ヶ池に種痘所が建設されるにあたって 82 名の医師たちの拠金によるものであるという通説が、単純な誤植に端を発して

いるという事実をみいだして、これが83名の誤りであることを報告した。この83名の掘金者の名簿を見ると、わずかに姓名のみが判明しているにすぎない医師が数多くいることが明らかになり、以後その空欄を埋めるべく鋭意文献をもとめたが、その出自や業績が判明したのは残念ながらわずか5名の医師にすぎない。本例会ではその5名の医師について報告した。

1) 手塚良庵：掘金者名簿には襲名前前の良庵で掲載されているが、これはのちの良仙光亨である。常陸府中藩医良仙光照の長男で、安政2年(1855)11月25日に359番目の弟子として大坂の適塾に入門した。『福翁自伝』には「鉄川」という名前で女性に弱い人物としてかなり面白おかしくかかっている。安政4年に退塾して江戸にもどってお玉ヶ池種痘所の発足にあたって尽力した。

文久3年(1863)には新たに発足した歩兵屯所附医師となり、のちに医師取締に昇進した。維新後は医学校試補として医学教育の場で活躍し、ついで三転して陸軍軍医部に勤務し、明治10年(1877)には近衛歩兵第一連隊附陸軍軍医官として西南戦争に従軍した。城山の西郷軍への総攻撃が官軍の勝利に終わった2日後に赤痢を発病して、大阪城内にあった大阪陸軍臨時病院で10月10日午前11時20分に51歳の生涯を閉じた。なおこの良庵の曾孫が漫画家手塚治虫にあたる。

2) 手塚良斎：信州川中島今里村の今里総兵衛政弘の子で、天保12年(1841)に手塚良仙光照に入門した。弘化元年(1844)に良仙光照の次女秀と結婚して手塚姓を名乗った。坪井信道の日習堂に入門し、嘉永元年に長崎に留学してオランダ医学を修めた。嘉永2年(1849)11月に江戸にかえって下谷練塀小路で私塾を開いていた。文久3年(1863)3月に新たに発足した歩兵屯所附医師として幕末まで勤務し、その勤務日誌である「医学所御用留」をのこしている。

3) 太田東海：83名の医師のなかで江戸以外に住む唯一の医師である。良庵の母親の里方武蔵国橘樹郡溝口村にすみ、大槻俊斎に師事した。良庵の従兄弟にあたる。太田東海の履歴書(明治6年)

によってお玉ヶ池種痘所建設の議がはじまったのは安政4年6月であろうと推定した。

4) 奥山玄仲：芝赤羽橋にすむ上山藩医である。文久3年に新設された種痘所出張所の一つを担当し、明治期になってからも種痘医として自宅において種痘をつづけていた(「東京医家雷名鏡 明治18年」)。

5) 添田玄春：徳川幕府寄合医師の家格である添田玄春は、設立に協力した83名のうちでれっきとした数少ない幕臣である。しかしその祖父添田道周が江戸長崎屋でオランダ商館医と対談するなどの事蹟を残しているため、島田筑波論文にあるようにオランダ語やオランダ医学にも無縁でない「隠れたる蘭学者」といえようか。順天堂大学山崎文庫所蔵の「添田玄春日記」によって玄春が文久3年に長崎に留学した事実をつかみ、村田蔵六が小塚原でおこなった女囚解剖の日が安政6年10月6日であることを確定することができた。

これら5名の医師がお玉ヶ池種痘所の発足にあたって協力の機会をえたのは、手塚一族は太田東海をふくめて血縁によるものと思われ、添田玄春は漢蘭折衷医学の家筋によるものと思われるが、奥山玄仲がどのような縁故によったものかは不明であった。とはいえこれらの医師たちは牛痘接種法にたいする正しい認識を有していたことは明らかである。

35年以上にもおよぶ探索追及の結果として、経歴や出自など不明であった医師のうち、それが明らかになったのはわずか5名に過ぎない。その数の少なさにはわが力量の不足によると内心忸怩たるものがあるものの、これも精一杯の成果であったかとも自らを慰めている。

	生 歿 年	安政5年 の年齢
手塚良庵*	文政10年(1827)－明治10年(1877)	32歳
手塚良斎	文政7年(1824)－明治8年(1875)	35歳
太田東海	文政12年(1829)－明治8年(1875)	30歳
奥山玄仲	文化7年(1810)－明治38年(1905)	49歳
添田玄春	文政9年(1826)－明治2年(1869)	33歳

*のちの手塚良仙光亨

(平成27年10月例会)